



しゅごキャラ！二次創作
テノヒラサイズ

はなび

イクあむでイクトがあむの胸が小さいと言ってあむが傷つく

「……」

「なに？」

服に袖を通してゐる亜夢を、幾斗がじっと見つめていた。その視線に気づいた亜夢が、じろ、と睨む。

「いや、別に」

「……」

素気なく、幾斗は答えるが、なにかを言いたそうな表情なのは、言わなくてもわかる。

「言いたいことがあるなら、言えばいいじゃん」

「んー……」

少しだけ考えて、やっぱり幾斗は言わない。そういう幾斗の態度に、亜夢はだんだんイライラが募る。

「なんなのよ!? はっきり言えばいいじゃん！」

「言ったら、あむ、怒るし」

「怒んないよ」

「ウソ」

「怒んないってば」

たぶん、という言葉の飲み込んで、亜夢は幾斗を見やる。しばらく考えたあと、幾斗は重い口を開いた。

「あむって、年齢のわりに大人っぽいし。子供だって忘れそうなどきがあるんだけど」

うん、と頷いて、亜夢は言葉の続きを待つ。

「抱くと、やっぱり……。ところどころ幼いし、子供なんだなって実感する」

「……それは、もしかして」

ぴく、と亜夢の眼元が引きつる。

「あたしの胸が、小さい、って……？」

「そう、はっきりとは……」

「言っても、思ったってことでしょ!？」

「……」

ぼりぼり、と頬を搔いて、幾斗は亜夢から視線を外す。その瞬間、幾斗の上に、亜夢の雷が落ちたのだった。



「それで、1週間？」

「イクトからの連絡を、無視してるって？」

「……」

ウーロン茶の入ったグラスを手にとって、亜夢はストローを咥える。

「あむちゃん、前から胸が小さいこと、気にしたもんね」

「え？」

なぎひこの言葉に、亜夢は顔を顰めた。

「な、なんでなぎひこがそんなこと知ってるのよ!？」

「え？ あ……」

はっとして、なぎひこは言葉を見つけた。

「な、なでしこに聞いたんだよ。うん」

「そんな話までするの!? もー、なでしこってば、ひどいっ」

はは、と乾いた笑みを洩らして、なぎひこは軽くため息を吐いた。

よくこれで今までバレなかったものだ、と空海は面白そうに2人のやり取りを見つめている。それから気を取り直したかのように、空海は口を開いた。

「で、俺たちに相談したのは？」

「うん。だから、ね。やっぱり男の子って、小さいよりは大きいのがいいのかなって……」

だんだんと声を潜めて、亜夢は呟く。きよとん、として、空海となぎひこは顔を見合わせた。

「人によるんじゃないか？ そりゃ、ないよりはあった方がいいけど。あんまりでかいのも、気持ち悪いって」

「でも、一度は顔を埋めてみたい、とか思わない？」

「あー。わかるな、それ」

「りまちゃんも小さいからね。それをできないのが少し残念、かな」

「ま、歌唄もなー。年上だから、日奈森や真城よりはでかいけど。顔を埋められるほどではねえし。ま、見た目よりはあるけどな」

「……」

2人の会話に、亜夢は唖然としてしまった。この2人に相談したのは、もしかしたら間違っていたかもしれない。女の子を目の前にしているのだ、と少しは自覚して話をしてもらいたいものである。

「ま。要は、さ」

くす、と口元を綻ばせて、なぎひこが亜夢を見る。

「大きくても小さくても、あむちゃんをあむちゃんなんだよ」

「イクトが日奈森を選んだっていう事実があれば、別にそんな大して気にする問題でもねえだろ？」

「……でも」

きゅ、と唇を噛み締め、亜夢は俯く。そうは言っても、やっぱりショックではあった。決して大きくはないことも、どちらかといえば小さい部類であることも、自覚はしていた。

だがそれを、面と向かって言われたら。

きっと、誰だって傷つくと思う。

「あむちゃんは、イクトがあむちゃんを好きだから、一緒にいるの？ あむちゃんは、イクトを好きじゃないの？」

なぎひこの言葉に、亜夢は一瞬、目を丸くして。それから、首を横に振った。

「あむちゃんも、イクトを好きだから。だから、一緒にいるんでしょ？」

少しだけ頬を赤らめて、亜夢は頷く。すると、大きな空海の手が亜夢の頭に乗った。

「そんだけわかってりゃ、上等。行こうぜ、日奈森」

「い、行行って、どこに？」

「イクトんところ」

にか、と微笑んだ空海に、亜夢は素直に首を縦に振ったのだった。



「なんで、2人一緒に？」

玄関先で亜夢と空海を出迎えた歌唄は、2人の姿を見て目を丸くした。

「偶然、そこで会ったんだよ」

一緒に来た、とは言いづらくて。空海は、そう答える。そう、と訝しげな表情のまま頷いて、歌唄は身を翻した。

「……歌唄も、こうして見るとあんまりないんだけど」

背を向けた歌唄に、空海はそっと近づいて。

「!？」

「着痩せするタイプみたいで。触ると、結構あるんだぜ」

いきなり、後ろから歌唄の胸を鷲掴みした。瞬間、ぱあん、と濁いた音が月詠家に響く。歌唄の掌が、空海の頬を叩いたのだ。

「なにするのよ!？」

顔を真っ赤に染め上げた歌唄は、そのまま自分の部屋に走って行ってしまった。ばたん、と勢いよくドアが閉まる。

「てー……」

叩かれた頬を擦ると、呆気に取られた亜夢と視線が合った。ふ、と微笑んで、空海はウインクを送る。

なんとなく、亜夢の固まった緊張を解すための言動だったのだろう、と思ってしまった。

「謝ってよ」

「……ごめん」

「気持ちが籠ってない」

ぷう、と頬を膨らませて、亜夢は幾斗を睨む。そんな亜夢の仕種がかわいくて、幾斗は口元を綻ばせて亜夢の腕を引っ張り、その腕に抱き締めた。

「ごめん。会えなくて、寂しかった」

「……」

きゅう、と胸が締めつけられるように痛む。寂しかったのは、亜夢も同じで。会いたかったのに、意地を張って会わないようにしていた。

『ごめん』の言葉に気持ちが入ってなくても、許してしまえる自分がいて。結局、幾斗には適わないな、とってしまった。

「大きいほうが、好き……？」

ぼそ、と亜夢は呟く。やっぱり、聞いてしまった。答えに、落ち込んでしまうかもしれないのに。どうしても、聞きたくて。

「あむが、好き」

ぎゅ、と抱き締める腕に力を込めて、幾斗が囁く。そういうことじゃなくて、と顔を上げれば、幾斗の唇が落ちてきた。

「俺の手にすっぽりおさまるあむの胸に、安心する。俺の手から溢れて漏れないあむの胸が、好き」

「……」

胸の大きさで、愛の大きさが変わるわけではないから。たとえ小さくても、幾斗が亜夢を好きだという事実は変わらない。それが大きくなったとしても、同じこと。

亜夢は、亜夢だから。亜夢の外見を、好きになったわけではないから。亜夢の中身に、外見がついてきただけのこと。

「あむが、女の子から女に変わっていくさまを見れるんだ。それって、すごい幸せ」

幾斗仕様に、変えられていく。幾斗以外を愛せなくなるほどに、変えられていくのかもしれない。幾斗がそばにいるのなら、それでもいい。

この恋はきっと一生手放すことはできない、と思いながら、亜夢は幾斗の影とともにベッドに沈んでいった。

しゅごキャラ！二次創作

テノヒラサイズ

はなび

E-Mail hanabi7220@gmail.com
URL <https://lycka.cocotte.jp/871/>
Twitter @hanabi7220

- 本書は非公式ファンブックです。原作者さま、出版社さまとは一切関係ございません。
- 本書を無断で複写、転載、転売、オークションで出品等をするのはご遠慮ください。

おうちでつくる同人誌

<https://cweb.canon.jp/pixus/special/room/doujin/>